

# いのちの大地



【ナレーション】  
このお話は、シタスや牛乳、スキー場で有名な岩手県一戸町にある奥中山地方を舞台としたお話です。

## いのちの大地



【ナレーション】

18歳になった佐市郎は、ある時こんな話を耳にしました。

【村人】

「大塚谷地(おおづかやず)は、郡内で、いづばんの、ひれえ土地(とず)だ。

あそごを耕せば、こごらへんでいづばんの大百姓になれる。今は林や沼だらけで、オオカミも出るっつうども、新すう国道もできたす、あとぺっこで鉄道も通るっつうし…。」

【ナレーション】

百姓にないたかった佐市郎は、それを聞いて決心しました。

【佐市郎】

「よし、おらがそごさ行って、立派な畑さしてみせるじゃあ。」

## いのちの大地



【ナレーション】

明け方、心配そうな家族に見送られて、佐市郎は元気に大塚谷地(おおつかやち)へ出発しました。

毛無森(けなしもり)を越えてがむしゃらに歩き続け、オオカミが出るという山の中を無我夢中で走りました。

【佐市郎】

「どのくれえ来たんだべ。

ほれ、あとぺっこで山のてっぺんさ出るとぞ。

…うわあー！」

【ナレーション】

佐市郎の前には、目がさめるような大平原が広がっていました。

大塚谷地に着いたのです。

## いのちの大地



【ナレーション】  
その日、佐市郎は法華(ほっけ)さんという人の家に泊めてもらいました。

【法華さん】  
「こごらへんは天皇陛下の土地だすけ。  
みんなちけえうちに出ていかねばなんねんだ。」

【佐市郎】  
「えっ、おらはここで百姓すっぺえと思って来ぬす。  
どうにがなんねえすか。」

【法華さん】  
「んだどもなあ。」

【佐市郎】  
「ほんだ！  
役場さ頼んで、この土地をおらたづさ貸してもらうべえ。」

【ナレーション】  
佐市郎はさっそく小鳥谷(こずや)村の役場へ出かけ、大塚谷地を自分たちに貸してもらう約束をしました。

## いのちの大地



【ナレーション】  
やがて**21歳**になった佐市郎は、**16歳**のオリ子と結婚しました。

【佐市郎】  
「よし、この土地を耕すて畑さすっぞお。  
このおっきだ沼の水を抜いて、広い畑さすっぺ。」

【ナレーション】  
佐市郎は、水を流す用水路を**1ヵ月**もかけて掘りました。  
村人たちに、

【村人】  
「どうせ無理だべ。  
こっただ荒地だおん。」

【ナレーション】  
と笑われても、またくい返し掘り続けました。  
**1年**近くたったある朝、沼を見下ろした佐市郎がさけびました。

【佐市郎】  
「オリ子、やったじゃ！ どうとうやったじゃ！」

【ナレーション】  
水は、用水路に流れこみ、沼には黒い地面がぽつぽつと見え始めています。

【オリ子】  
「あんだ、いがったなす、いがったなす。」

【ナレーション】  
**2人**は涙を流して喜びました。

## いのちの大地



【ナレーション】  
それから2人は力を合わせて荒地をたがやし、はじめに大豆を植えました。

【オリ子】  
「見てけろ、こったな立派な苗っこ。」

【佐市郎】  
「そいゃあ雑草をとって、虫がつかねえように大切に育てたすけえよ。」

【ナレーション】  
畑いっぱい的大豆を見て、おどろいたのは佐市郎を笑っていた村人たちです。

【村人】  
「佐市郎さん、おらだずさも教えてけねえが。」

【ナレーション】  
こうして大塚谷地では、みんなが大豆やヒエを作るようになっていきました。

## いのちの大地



【佐市郎】  
「さて、次は何がお金(かね)さなる作物(さぐもづ)をつぐって、みんなの生活を楽にしてえどもなあ。  
よす、寒い北海道で育つつう甘藍(かんらん)を植えてみるべ。」

【ナレーション】  
甘藍というのはキャベツのことです。  
種をまき、苗を畑に移し、まだあまり使われていなかった新しい肥料もまきました。  
きらきらと照りつける太陽の下で、朝から夕方遅くまで、佐市郎は熱心に育てました。  
そして、秋には大人の頭より大きい甘藍が出来上がりました。

## いのちの大地



【ナレーション】  
大塚谷地は、こうして色々な作物の畑が増えていきました。  
しかし、田んぼのない大塚谷地の村人たちは、自分たちが  
食べる米を買わなければなりません。

【佐市郎】  
「百姓が米を買うなんておがすうじゃ。  
よす、畑(はだげ)の一部を田んぼにして米を作るべ。」

【村人】  
「わがね、わがね。  
ここは寒さが厳しいすけ、山がらの水はしゃっこいがら、稲は  
いつまでたっても育だねえべよ。」

【ナレーション】  
村人たちは再び佐市郎のことを笑うようになりました。



## いのちの大地



【佐市郎】

「おらは絶対あきらめねえぞ。」

【ナレーション】

田んぼの隣にもうひとつ溜め池をつくって、山からの冷たい水をあたためてから田んぼに流しました。

そして寒い土地でも育つ「坊主」という種類の稲を探し出し、収穫を増やす努力を続けました。

## いのちの大地



【ナレーション】  
こうして何年か後、ついに佐市郎の田んぼでは、一面の稲穂が金色に輝いたのです。  
佐市郎はそれから一生懸命米づくりにおげみしました。  
平原に道をつくったり、子供たちの教育のために小学校を開いたほか、大塚谷地の水を「天然水」として売るなど、アイデアに富んだ仕事もしています。  
そしてのちに、佐市郎は多くの人々から「奥中山開拓の父」とたたえられたのでした。

おしまい